報 告

経絡(血管, 神経)私考

村 主 祥 行*

要旨 血管とか神経という名詞, これは日本の西洋医学名詞で, 漢方医学名詞の中には, 血管とか神経という名詞はありません。あるのはただ「脈」(経脈, 絡脈, 孫脈)という, 経絡名詞だけである。したがってこの経絡脈が, 血管や神経のことでなければ, 漢方医学には, 解剖学上, 血管もなければ, 神経もないことになる。

古人のいう経絡とは, 血管や, 神経のことである。

I 緒 言

ここでいう経絡とは, 皮膚表面上の, 経穴と経穴を, 結びつらねた, 「経絡路線」に対する, 解釈ではなく, 古人が気血, 榮衛という生命の源泉が, 365日休みなく, 12経絡を流注(循環)している, と, 説明している, 組織解剖学上の経絡に対する, 解釈である。

II 考 察

1. 血管という名詞について

これは日本の西洋医学名詞で, 鈴木文太郎著, 解剖学語彙(1905)で, 独語の「VAS」が, 血管と翻訳されて, 今日にいたっている。

2. 動脈という名詞について

これは古今を通じて, 同じ名詞が使われている。

3. 静脈という名詞について

これも日本の西洋医学名詞で, 医範提綱の著者, 宇田川榛斎(1805)が, オランダ語の「Blut, ader」(ボルアデル)を, 静脈と翻訳し, その書の中で使っている。漢方医学では, 血絡, 浮絡, 青脉, 青絡脉, という名詞を使っている。静脈のことである。

4. 神経という名詞について

これも日本の西洋医学名詞で, 解体新書の著者, 杉田玄白(1774)が, オランダ語の「Zenuw」(セイニー)を, 神経と翻訳, 命名し, 現在にいたっている。

5. 諸橋漢和大辞典より。

経絡——身体のすぢ, 及び脈管。

経脈——からだの脈, 血管, 脈管。

絡脈——すぢみち, 人体の神経, 血管などをいふ。

榮衛——血氣, 血液と生氣, 榮は血, 衛は氣, 營養

氣血——生氣と血液, 血の循環

と, このように訳されてある。

6. 経絡(血管, 神経)説, に関する考証集, 抜粋(順不同)

考証 1. 難經本義一難にいわく

一難曰, 十二經皆有動脈

(私註) 十二經(十二経脉)は, みな動脈を有す。

と, この一節だけでも, 経絡に動脈(血管)が, 含まれていることが, 立証できる。

考証 2. 靈樞經, 卷一

腋内動脈。手太陰也。名曰天府。腋下三寸。

(私註) 腋の内側の動脈。手太陰なり。名いわく, 天府。腋の下三寸のところ。と, 腋の内側の動脈とは, 現代医学の上腕動脈のことである。この上腕動脈のことを, 手太陰肺経の動脈である。と, 説明している。手太陰肺経には, 動脈が含まれている。

*Yoshiyuki MURANUSHI 京都府鍼灸師会

Key Words: 経絡, 血管, 神経

なおこの上腕動脈とか、橈骨動脈とかいう固有名詞の血管名、これは日本の西洋医学名詞で、漢方医学名詞の中には、上腕動脈とか橈骨動脈とかいう、固有名詞の血管名は、ありません。あるのはただ、手太陰肺経という、経絡名詞だけである(この点を理解してもらいたい)。

なお、俠白、尺沢穴について

俠白。在天府下去肘五寸，動脈中。(甲乙経，卷三)

(私註) 俠白は天府の下，肘を去る五寸，**動脈中にあり。**

と，なっている。これも上腕動脈の上になる。

尺沢(天沢)在肘中約上動脈。(甲乙経)

(私註) **尺沢は肘窩横紋の中央，動脈上にあり。**

と，なっている。

これも上腕動脈の上になる。しかるに教科書及び中国の経穴学では，前上腕の中央，二頭筋腱の橈側になっている。どうしてか？

考証 3. 素問平人氣象論に

婦人手少陰。脈動甚者。妊子也。

(私註) **婦人手少陰，脈の動き，はなはだしき者は，子をはらむなり。**と，

婦人が妊娠すると，手の少陰の脈の動きが早くなる，と書いている。

手少陰の脈は，動く脈管，である。

およそ人体内で，動く脈管といえば，動脈管しかない。とすれば，靈道，通里，陰郄，神門，の位置よりして，これは現代医学の「尺骨動脈」に該当する。

なおこの尺骨動脈という名詞，これも日本の西洋医学名詞で，漢方医学名詞の中には，尺骨動脈という，固有名詞の血管名は，ありません。あるのはただ，手少陰心経という，経絡名詞だけである。

(どうかこの点を，重々理解してもらいたい)。

考証 4. 鍼灸甲乙経，卷三，に

顱息。在耳後間。青絡脈。足少陽脈氣所發。刺入一分。出血多。則殺人。灸三壯。

(私註) **顱息。**耳の後の間の，**青絡脈**にあり。足少陽の脈氣。発する所。刺入一分。出血多きは，すなわち人を殺す。灸三壯。と，

1) **青絡脈**に鍼を刺せば，血が出る。と書いている。およそ鍼を刺して，血の出る脈管は，血管

しか考えられない。

2) その出血の多い時は，すなわち，人を殺す。とも書いている。

3) 語学上の解釈より。

青い，は絡脈に対する形容詞，絡脈は血管，青い血管は，静脈として理解できる。

(註，教科書では，禁鍼穴になっている)。

考証 5. 素問，陰陽別論に

黄帝問曰，人有四経十二従，何謂，岐伯対曰，四経応四時，十二従，応十二月，十二月，応十二脈，(春脈弦，夏脈洪，秋脈浮，冬脈沈，謂四時之経脈也，従，謂天氣順行十二辰之分，故応十二月也)

(私註) 人四経十二従を有するとは，何をいうのか，岐伯答えていわく，四経(四季の経脈)は，四時(四季)に応じる，十二従は，十二月に応じる。十二月は，十二脈に応じる，(春脈弦，夏脈洪，秋脈浮，冬脈沈，これ四季の経脈をいうなり，従とは天氣(天体)順行十二辰(十二月)の区分をいう，故に十二月に応じるなり)，と

このように，四季の気候の変化によって，経脈(経絡)の脈拍の状態が，違うということを，説明している。

弦，洪，浮，沈，とは，脈拍の状態をいう。経脈とは，血管のことである。？

考証 6. 難経本義一難にいわく

謂之経者，以榮衛之流行，經常不息者而言。謂之脉者，以血氣之分婁行體者而言也。故経者，徑也。脉者，陌也。越人之意，蓋謂此十二経，経皆有動脉。(以下略)

(私註) 経は，榮衛(気血)の流れめぐるをもって，経はつねにやすむことなしという。脉(絡)は，血氣(血液と生氣)のわかれてもって，身体をめぐるものというなり。故に，経はみちなり。脉(絡)はあぜみちなり。越人(扁鵲)の意，**けだしこの十二経をいう。経みな動脈を有す。**と，

(註，血液循環生理学を，説明している)

経とは，タテ，脈とは血管，タテに通っている，太い血管を，経脈といい，この経脈から横に分かれた，支脈のことを，絡又は絡脈と呼んでいる。この絡脈から，更に分れた細い脈のことを，孫脈，又は孫絡，小絡，細脈，細絡，等と呼んでいる。

細血管のことである。

考証 7. 素問調經論に、(卷十七)

痛在於左而右脈病者，巨刺之。(巨刺者，刺經脈，脈左痛刺右，右痛刺左)。

(私註) 巨に刺すとは、經脈に刺すことをいう。脈、左の痛むは、右を刺し、右痛は、左を刺す。と、

このように痛みは、經脈と関係あるものとして説明している。

痛みは神経と関係がある。故に經脈は神経とも関係があることになる。しかしこの神経という名詞、これは日本の西洋医学名詞で、漢方医学名詞の中には、神経という名詞は、ありません。ただ痛みという表現のもとで、神経の存在を知っている。?

古人は血管と神経を、一つの「モノ」として解釈していたようである。故に經絡を、総称で説明している。

考証 8. 難經、三十難に

榮行脈中。衛行脈外。と、

(私註) 榮は脈中をめぐる、衛は脈外をめぐる。と、

脈とは經脈のこと、榮とは血のこと、衛とは気のこと(諸橋漢和大辞典)。

經脈の中を、榮(血)がめぐり、經脈の外を、衛(気)がめぐっている。と説明している。事実、血管の中は血がめぐり、血管の外(動脈の外)には、神経幹が随行している。古人はこの血管と神経が、唯物的(解剖学的)には、分類できなかったようで

ある。そしてこの血管と神経を、合わせ含めて、經絡という総称で、これを説明している。悪意に解釈すれば、唯物的混同ともいえるし、善意に解釈すれば、血管と神経の集合名詞(コンビネーション)これが古人の説明する經絡である。

III 結 論

要するに、血管とか、神経という名詞、これは日本の西洋医学名詞で、漢方医学名詞の中には、血管とか、神経という名詞は、ありません。あるのはただ、經絡名詞だけである。従ってこの經絡が、血管や神経のことでなければ、漢方医学には、解剖学上、血管もなければ、神経もないことになる。?

参考文献

- 1) 鈴木文太郎、: 解剖学語彙、京都府立資料館蔵。(1905)
 - 2) 宇田川榛齋: 医範提綱、京都府立資料館蔵。(1805)
 - 3) 諸橋徹次: 大漢和辞典、大修館書店。(1971)
 - 4) 元滑壽著: 難經本義、上海商務印書館。(1956)
 - 5) 中国人民衛生出版社、靈樞經、新華書店。(1956)
 - 6) 唐王冰註、: 黃帝內經素問上下卷、上海商務印書館。(1957)
 - 7) 晉、皇甫謐撰: 鍼灸甲乙經、上海商務印書館。(1955)
 - 8) 小川鼎三: 解体新書解説、講談社。(1973)
- (〒611 宇治市羽拍子町32 京都府鍼灸師会)

Personal Consideration that KEIRAKU Means Blood Vessel and Nerve

Yoshiyuki Muranushi

Kyoto Acupuncture Association

Nouns that blood vessel and nerve are the terms of western medical science and not those of ancient oriental medical science. What is found in ancient oriental medical science is only MYAKU (KEIMYAKU, RAKUMYAKU, SONMYAKU) which is called KEIRAKU. Therefore, unless this KEIRAKUMYAKU implies blood vessel and nerves, anatomically there are no blood vessel and no nerve in ancient oriental medical science. KEIRAKU which ancient chinese said means blood vessel and nerve.